

平成 30 年 6 月 5 日現在

機関番号：34316

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2014～2017

課題番号：26590151

研究課題名(和文) 広汎性発達障害児の「独特な言語」と個人的経験による限定的な文脈の関係の検討

研究課題名(英文) The relations of "the unique language" of a boy with autism spectrum disorder, accompanied by a slight developmental delay and restrictive context by his personal experience

研究代表者

郷式 徹 (GOSHIKI, Toru)

龍谷大学・文学部・教授

研究者番号：40332689

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,600,000円

研究成果の概要(和文)：軽度の発達の遅れ(DQ=85)を伴う自閉スペクトラム症の男児を対象に幼稚園年長から小学校3年時にわたり、対象児の経験と関連する限定的な文脈のもとでのみ理解可能な言語行動に関して、縦断的な自然観察を行った。

その結果、当初は、アニメやゲームのキャラクターのセリフをそのまま用いた発話が多く、対象児のことをよく知らない人には通じにくかった。小学校入学後、読み書き能力の向上による語彙の増加とともに発話は柔軟になってきた。一方、弱いこだわり行動や理解されにくい発話(アニメの中のセリフなど)は継続している。また、アニメのキャラクターになりきっての一人でのごっこ遊びは継続している。

研究成果の概要(英文)：A longitudinal natural observation study was conducted on a boy with autism spectrum disorder, accompanied by a slight developmental delay (DQ=85), from kindergarten to third grade, to examine language and behavior that were understandable only in limited contexts connected to his experience. The results showed that, at first, his speech contained many lines repeated verbatim from anime (cartoons) and video games and was hard to understand for people who did not know the boy well. After starting elementary school, his speech became more flexible as he learned to read and write and his vocabulary developed. However, he continued to exhibit mildly obsessive behaviors and difficult-to-understand speech (lines from anime, etc.), and he also continued to play make-believe by himself, pretending that he was an anime character.

研究分野：発達心理学

キーワード：自閉スペクトラム症 独特な言語使用 メディア接触の影響

1. 研究開始当初の背景

自閉スペクトラム症について、「社会性の障害」「コミュニケーションの障害」「興味の限局性」から成る自閉症の三つ組が広く受け入れられている。そして、コミュニケーションの障害には「CM やアニメのセリフを無意味に繰り返す」といった特徴があることが指摘されている(竹田・山下, 2004)。確かに、自閉スペクトラム症児が繰り返すつづやく言葉(例えば、CM のキャッチコピー)はその意図が理解できないことも多い。ただし、そうした発話もその子と生活を共にしている親やきょうだいには理解できることもある。また、そうした一般的、常識的な文脈での自閉スペクトラム症児の発話の理解の難しさが障害の特徴的な症状とされてきた。それに対して、自閉症の当事者が自らを語った報告(例えば、ウィリアムズ, 2000)では、一般的、普遍的とは言えないかもしれないが、彼らが十分に理解可能な内的世界を持っていることが示されている。すなわち、「常同的で反復的な言葉の使用または独特な言語(DSM-)」とみなされる言葉も、「無意味」なのではなく、自閉スペクトラム症児自身の経験と関連した限定的な文脈に基づいているために(一般的、常識的な文脈で理解しようとする)他者にとって理解困難なのかもしれない。

2. 研究の目的

スムーズな発話にも関わらず、自閉スペクトラム症児の発話内容は理解するのが難しい場合が多い。しかし、彼らの発話は第三者には理解が難しいが、生活を共にしている者にはわかる場合がある。つまり、自閉スペクトラム症児の発話の中には、一般的、常識的な文脈では理解が難しいが、その子自身の経験と関連する極度に限定的な文脈のもとでの言語行動(符牒のようなもの)と捉えると理解可能になるものがある。本研究では、家庭内での自閉スペクトラム症児の「常同的で反復的、または独特な言語」を記録・収集し、その発話が発話者の個人的な生活や経験による文脈からならば解釈可能であることを示すことを目的とした。

3. 研究の方法

対象児: 特別支援級に在籍する平成26年4月1日時点で6歳5か月の自閉スペクトラム症児。IQ80~85程度の軽度の発達の遅れが疑われるが、学習面では適切な補助があれば、学年相当の能力を示す。

データ収集方法: 幼稚園年長から小学校3年時にわたり、家庭内での自閉スペクトラム症児の「常同的で反復的な言葉または独特な言語」を、対象児の父親(研究代表者)が主に身体に装着可能な小型

ビデオカメラ(ウェアラブルビデオカメラ)を用いて記録・収集した。また、対象児の経験した出来事、見たアニメなどについて対象児の父(研究代表者)と母が日誌に記録した。両方の記録から、「常同的で反復的、または独特な言語」の解釈を順次行った。

4. 研究成果

(1) 26年度(対象児: 5歳6ヶ月~6歳5ヶ月(幼稚園年長組在籍))

言語使用に関して、ごっこ遊びの中で同年齢の子どもたちの間で流行っているアニメやゲームの影響で、レゴブロックやその他のおもちゃを用いて、一人でごっこ遊び(戦いごっこ)を行う様子が頻繁に記録された。

また、年度後半には、母との会話で、時折、ゲームのキャラクターがその場において会話に参加しているような発言を行うことが見られるようになってきた。他に、1歳年長の次兄とのごっこ遊びにおいて、設定に関する発言等が明確になってきた。特に、次兄がアニメやゲームとは異なった独自の設定や解釈を行った場合に、「ちがうで、ちがうで。 やで」という風にオリジナルの名称や台詞にこだわる様子が見られた。なお、当初は、ごっこ遊びの設定に関しては自分の主張をするのみで、相手(次兄)と調整することができなかったが、年度の終盤には、時折、相手の意見を受け入れる場面が出てきた。

その他、あげる-くれる、してもらう-してあげる、される-する等のことばで視点の混乱を示す使用が見られた。

(2) 27年度(対象児: 6歳6ヶ月~7歳5ヶ月(小学1年特別支援級在籍))

言語使用に関しては、会話が続かない場合もしばしば見られるものの、家族内では改善されつつある。そのため、アニメやゲームのキャラクターになりきっての一人でのごっこ遊びが頻繁に見られる一方で、1歳年上の次兄とのごっこ遊びでは設定などについて調整に応じることのできる場面が若干見られるようになってきた。ただし、過去の場面を思い出した上での発話が時折あるが、それがどのような場面であったのかを会話の相手が思い出せずに会話が成立しないことがある。

また、小学校での学習に関して、数の理解や足し算・引き算は当初よりついていけたが、ひらがなの読み書きは若干の困難があった。ただし、(小学1年生の)1年間を経て、読みに関しては相当の改善が見られる。一方、学校でのコミュニケーションに関しては十分に取れていないようである。担当教員との会話も質問に対する回答という形では成り立っているが、日常的な会話については不十分なようである。これは担当教

員が、対象児が現在興味を持っているアニメやゲームを知らないことの影響が大きいと思われる。なぜならば、月に1回程度通っている「ことばの教室」の担当者（対象児が興味を持っているアニメやゲームについて予習して訓練に臨んでいる）とは相対的に良好な会話が成立しているからである。以上のことから、家庭で把握している会話能力や言語・概念に関する学習の力に比べて、学校ではそうした能力が低く見積もられており、対象児に対する関わりが発達年齢よりも低いものになっているようである。

(3) 28年度（対象児：7歳6ヶ月～7歳6ヶ月（小学2年特別支援級在籍））

26～27年度にかけて、言語能力および認知能力の伸びが見られた（IQ80未満から85強に）。それにより学習面（計算・読み書き等）については何度か行ったことのある手順であれば、学年相応の課題に取り組める場合が増えてきた。一方で、弱いこだわり行動や相手に理解されにくい発話は継続している。認知能力の伸びと学校での学習への慣れに伴い、学習面で学年相応の力を見せる領域がある反面、こだわりにより適切な反応や行動の切り替えが難しい面が明確になるといったことが生じ始めた。

コミュニケーションにおいては語彙の増加や心的動詞を含めた自身および他者の感情や内面の描写が頻繁に見られるようになってきた。読み書き能力の進展により簡単なマンガを楽しめるようになってきたが、場面へのこだわりがあり、自分の面白かった場面について他者に（十分な説明なく）話そうとすることが増えた。こうした傾向は以前からテレビ番組やオンライン動画などでは見られたが、マンガの場合、自分の話している内容が他者に伝わらない場合、そのページを開いて読むように求めることが多い。

会話能力には改善が見られるが、幼児期より継続しているアニメやゲームのキャラクターになりきっての一人でのごっこ遊びは減少することなく続いており、ある種の常同行動的な様相を見せつつある。

(4) まとめ

5歳時には、母親や次兄との会話でアニメやゲームのキャラクターの台詞を用いる様子が見られた。そうした台詞は対象児の発話を促しているように見える反面、アニメやゲームの中でのその台詞の設定にこだわってしまい、会話や行動の柔軟性を阻害しているようであった。また、一人でのごっこ遊びにおいてアニメやゲームのキャラクターになりきることが始まった。これは一人でのごっこ遊びに一定の枠組みをもたらした反面、遊び相手がいない時にはパターン化した一人でのごっこ遊びを行うようになり、その後、ある種の成同行動となって

いった。

6歳時には、会話野中でアニメやゲームのキャラクターの台詞を用いるものの、家族間では相当理解できるようになってきた。その結果、会話がスムーズになってきた。家族以外の人との会話では、相手が対象児の興味や関心についてどの程度理解しているのかによって、成立の程度がかなり異なる。

7歳児には、文字がかなり読めるようになってきた結果、対象児の興味・関心がアニメやゲームからマンガへと広がった。マンガの場合、前の場面に戻ったり、自分の興味のある場面に飛ぶことが容易であるため、他者にそれを示すことにより、マンガの中の台詞を用いた場合も、その状況を伝えることができる。また、マンガではアニメやゲームに比べて、文字情報による状況説明があるため、対象児における状況の言語化へとつながっているようである。

引用文献

竹田 契一・山下 光 2004 軽度発達障害とその幼児期の特徴：高機能広汎性発達障害・ADHD・LD・軽度知的障害，発達，97，6－12.

ウィリアムズ，D.（著）河野万里子（訳）2000 『自閉症だったわたしへ』新潮社

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計1件）

Goshiki, T. Effects of knowledge of common practice on adults' performance in false belief tasks. 龍谷大学教育学会紀要、査読なし、15巻、2016 25-40.

〔学会発表〕（計6件）

子安増生、郷式 徹、児童における文字・図形模写の発達に及ぼすメディアの影響（2）、発達心理学会第26回大会、2015年3月20～22日、東京大学本郷キャンパス

KOYASU, M. & GOSHIKI, T. A longitudinal study of copying complex Chinese letters and figures in elementary school children. 14th European congress of psychology 2015年7月 Milano, Italy.

KOYASU, M. & GOSHIKI, T. Effects of media exposure on the development of copying complex Chinese letters and figures in elementary school children. 17th European conference on developmental psychology 2015年9月 Braga, Portugal.

GOSHIKI, T. A case of acquisition of mentalizing from various forms of media by a child with autism. 31th International congress of psychology. 2016年7月24～29日 Yokohama, Japan.

郷式 徹、心の理論と実行機能：誤信念課題と抑制を中心に 日本認知科学会第34回大会、2017年9月、金沢大学角間キャンパス

郷式 徹、幼児期におけるシンボリック表象の発達：ふり・描画・自己映像理解の発達を通して、日本発達心理学会第29回大会、2018年3月、東北大学

〔図書〕(計3件)

郷式 徹 他、「心の理論」から学ぶ発達の基礎：教育・保育・自閉症理解への道。ミネルヴァ書房、2016、250
子安増生・郷式 徹(編) 心の理論：第2世代の研究へ、新曜社、2016、216
郷式 徹 他、発達科学ハンドブック第9巻社会的認知の発達科学、新曜社、2018、297

6. 研究組織

(1) 研究代表者

郷式 徹 (GOSHIKI Toru)
龍谷大学・文学部・教授
研究者番号：40332689